

# 彦龍周興評伝

The critical biography of Genryū Shūkō

蔭木英雄

彦龍周興は『蔭涼軒日録』（以下「日録」と略称）によると石井氏の

出身で、長祿二年九条陶化坊に生まれた。<sup>(2)</sup> 祖父は法名泰岳玄豊、民部

省に仕え子孫は百十三人も数え、長享三年正月廿六日に九十四歳で死

んでいる。父は不明であるが、母については『平陶文集』（彦龍の詩文

集）の「心空貞香禪尼香語」によって大休の人がらは知り得る。母は

曹洞禪に参じる傍ら阿弥陀仏に帰依して毎日聖号を浄書し、裁縫が上

手で和歌にも堪能で、文明十五年八月廿五日五十八歳で逝去してい

る。従って彼は母の三十歳の時の子ということになり、俗兄は九条家

の被官石井河内守であった。<sup>(4)</sup>

彦龍は幼年時代を近江（詳細不明）で過ごし、<sup>(5)</sup> 大乱を避けて楠葉に

住したのは応仁元年十歳のことであった。<sup>(6)</sup> 伝宗寺であったかも知れ

ぬ。<sup>(7)</sup>

楠葉では大業という老僧の教えを受け『文集』に「次大業老人句」

と題し、

暮史朝経雪与螢 老禅壮氣庄秋冥 僧竜豈合終身臥 法雨明年  
起疾霆

（訳）朝に夕に史書経書に励み、大業和尚の壮気は秋ぞらを庄するばかり。

すぐれた僧は生涯うずもれはせぬ。来年には雨を降らせ雷をとどろか

せて起ち上るであろう。

という作がある。横川景三の『蘆菴集』の「大業住江宏済江湖疏」に

「某貧無卓錫、智有余刃。寒窓冷案、読書惜日余月余」とある

ように、大業一突は孤高で貧しく、年老いるまで出世しなかった人で

ある。一休宗純が少年の時に参じた謙翁宗為の如き僧だったのである。

彦龍はさらに幻住和尚即ち胤仲和尚にも教えを受けたらしく、

「余髻のときは楠葉、壮のときは豊山（承国寺）、和尚皆教ふべきの

地に置く。其の恩為る亦た大なり。」（答字江普上司書）とある。

文明五年十六歳で楠葉を去った彦龍は何処へ行ったのであろうか。

万里集九の『梅花無尽蔵』の「次韻興彦竜菊詩」の細注に「手時久

黙堂・興彦竜、避<sub>レ</sub>洛之乱、寓<sub>ニ</sub>尾之広徳精舎、とあるので、師の黙堂祖父と共に尾張の広徳寺に滞在し、又前述の「答字江普上司書」に拠つて、美濃にも足をのばしたと思われる。そして、

是より先、予岐陽に客たりし日、老人（栢舟宗趙）偶<sub>ニ</sub>宗門第一の書を講じ、予も其の席末に侍す。以ての故に公を知るや稔<sub>シ</sub>し。時に予歳僅かに志学を過るのみ。（悦雪子説）

とあるように栢舟宗趙の「碧巖録」の講義を聞いたり、

余、昔乱を避けて岐に寓せし時、麻斎利涉老師在り、余を教ふべき地に置く。亦た幸ならずや。尔来、師法施を泉南に移せば、余も往きて省し、拜侍して一宿し、詩を賦し句を聯ぬ。（明甫字説）

と、利涉守溱の文学的教えを受けている。多分、利涉が土岐氏菩提寺の靈葉山正法寺に住していた時のことであろう。

文明十年、廿一歳の彦竜は美濃から帰京するが、席の暖まる暇もなく秋に再び東下する。景徐周麟は「送彦竜興藏主帰東濃、兼簡万里老人」の七律を送るが、彦竜は万里集九の所では二泊したのみで、あわただしく帰京する。

文明十一年夏、幼時に遊びなれた二条邸を訪れた彼は、邸の荒廢に心を動かして「遊二条殿下泉亭詩」を作る。その序文でまず園吏定阿の歎きを写し、ついで、予曰く、「一弛一張は文武の道なり。廢の興有るは手の翻覆の如く、海晏河清は今其の時なり。……」相揖して別る。躑躅藤花、吾が曾を憶ふ有り」と記す。ただ単に無常の歎声に埋没してしまわず、只今よりの復興を信じる青年僧の向上関はずがしい。秋には五年ぶりで楠葉の大業老禪を省覲し、年末には「前現福

胤仲禪師住洛北真如同門疏」を述作した。初めての製疏であつたらしく、實際に入院儀式に用いられなかつたが、横川景三から、今時の蘿蔔四六文より賢れること遠し。余胤仲の此の挙有るを聞き、彦竜の此の文有るを見て、歛<sub>レ</sub>恒より倍す。蓋し国賀たる所以なり。」と激賞された。二十二歳にして彼の文名はとみに高まつたのである。

文明十二年、彦竜は相国寺で秉<sub>レ</sub>弘を遂げ、諸山の住持となる基礎資格を得る。異例の若さであつた。翌年の夏、五十三歳の横川景三に従つて永源寺に遊び、寂室派の僧の為に多くの字説を作り、横川や栢舟の代作までして健筆家の名を縦いままにする。小倉実澄や永原吉重ら地方武士と雅交を結んだのもこの時であつた。

文明十四年夏、彦竜は但馬に旅立つ。それは彼の全生涯に一大転機をもたらす行脚であつた。旅行目的は、三江（現在の豊岡市内）祥雲寺の古璠周璜を洛寺に招く為である。「答祥雲堂上詩」の序文を少し書き出し、古璠の人となりを見てみよう。

祥雲堂上老人、乃棟<sub>ニ</sub>于洛社、而梁<sub>ニ</sub>于吾門也。古璠は京の詩社でも夢窓門派でも主要人物であつた。乱後高臥但陰、痛斥時勢。蓋以吾道不古、叢林不古也。△禅林が古風を守らず墮落している時勢を非難して但馬に籠つてしまった。……今也及吾門牽落之日、而荷<sub>レ</sub>祖宗者、不幸而乏其人。則老人進以尽力於道、寔其時也。……乃奉<sub>ニ</sub>諸老命、詰且出<sub>レ</sub>洛、三日抵<sub>レ</sub>但。実文寅五月廿七日也。老人相見一咲、如三十年旧。

二人の相い会う機縁が熟していたのか、人生観・社会観が語らずして通じたのか、一見して十年の旧知の如く感じたのであつた。この時の

十五首のうちの一は、

有翁此地豈非京 翁有れば此の地も豈に京に非ずや

万戸何如一識荆 万戸何ぞ一識荆に如かん

門下従今若容我 門下今より若し我を容れば

野生自野莫相驚 野生自ら野にして相ひ驚くこと莫し

(訳) 翁がいっしょにゃれば但馬も京と同じ、万戸の都も翁一人の知己に及び

ません。門下に加えて下さるなら、私も野人となって翁の超俗自在の生活を驚かぬようになるでしょう。

で、古璠の居の祥雲寺は、

凡寺之為<sub>レ</sub>境 山開溪繞、所謂人傑而地靈者不<sub>レ</sub>誣矣。然而殿宇之制、頗近<sub>二</sub>古朴<sub>一</sub>。

と、境地も規矩も住持の人からにふさわしいものであった。古璠の禪風を慕って門徒は蝟集し、山間に斧斤の音がこだましていた。彦竜は延徳三年二月作「啓祥雲書」で、

夫れ興子(わたし)を生む者は父母なり。興子を成す者は祥雲老師なり。

と言いつ切っている。貴族化した五山僧は遊宴に衆生教化を忘れ、只管打坐を怠って講詩にうつつをぬかしている時代であった。養叟宗頤をはじめ大徳寺禪を悪罵することにより、禪界に警鐘を鳴らし続けた一休宗純が寂したのは、この前年である。かかる禪林にひそかに疑惑と危惧を抱いていた彦竜は、古璠に会って以心伝心、眼の鱗が落ちたのであろう。

翌十五年三月にも、彦竜は但馬を再訪する。今度は一人旅ではな

く、天橋立に行く文成梵<sup>70</sup>が一しよであった。雨を衝いて京を出た彼はさっそく七絶をものする。

情尽橋邊春雨斜 情尽くる橋邊春雨斜なり

征衫半濕別愁加 征衫半ば湿りて別愁加はる

東風有意莫吹落 東風意有らば吹き落す莫かれ

待我歸來洛下花 我が歸來を待て洛下の花

旅立ちの雨といえば、すぐ想い浮かぶのは、「謂城朝雨浥輕塵」の七絶で、彦竜はまず起句にそれを置き、承句には白楽天「琵琶行」の「江州司馬征衫濕」の詩情を移す。王維は西域に旅立つ友人に「西のかた陽関を出れば故人無からん」と、慰めるどころか突き放すことによつて、別愁の余韻を強く響かせた。それは丈夫<sup>ますらふ</sup>ぶりの別離であった。しかし彦竜は「春雨」「征衫濕」「落花」と都ぶりの語をちりばめ、「東風吹かは匂ひおこせよ」の道真の歌を転・結の句背に置いて、白詩風の離京の悲しみを歌うのである。

雨中三月四日に出京して六日晚には丹後に入り、土地の禪僧の為に「古月字説」を作つてやり、七日は船中で文成と句を聯ねるうちに天橋立に到着。九日から十五日まで九世戸智恩寺の文殊菩薩に参籠し、七日間「あびらうんけん」の五字文殊呪を五十万遍唱え、一日に一食、夜間に一寝のみとつて、

伏願、某外不<sub>二</sub>求<sub>一</sub>利求<sub>二</sub>名<sub>一</sub>、内每自恥自悔。道念堅固、実智發明、破<sub>二</sub>魔外軍<sub>一</sub>、透<sub>二</sub>祖仏位<sub>一</sub>、処々建<sub>二</sub>法幢<sub>一</sub>、塵々転<sub>二</sub>法輪<sub>一</sub>。

と一心に祈願し、四六文の「発願文」を全霊をふりしぼって書き上げ奉納した。長いのでその文章はここに掲げないが、在俗の筆者でさ

えその堅固な道心に搏たれる。

十六日に丹後九世戸を立てて但馬に向かう二人は、陸游の「細雨騎驢入劍門」（劍門道中遇微雨）を口ずさみつつ馬の背に揺られる。そして陸游のこの句を題に詩作しようと約すが、弘原という宿に着くまで二人とも作れなかった。文成は、「これまで詩文に宜しき地は多かったのに、疲れてはて了一篇も完成出来なかった」と歎いて、

夫れ仏家者は、剩水残山の間、千里も遠しとせずして、師を尋ね道を訪ふ。是れ為すべき所なり。吾儕の如き、其れ堪ふべけんや。今後相ひ共に努力せば之れ可なり。

と告白する。これを聞いた彦竜は、

公は真に吾が友なり。公に非ずんば此の語を聞かず。

と喜ぶのである。「発願文」を奉納して来た彦竜の脳裏には、これから訪れる古播周璜の姿があつて、「千里も遠しとせずして師を尋ね道を訪ふ」の文成の語に感激したにちがいない。

ところで、この陸游の作というのは、

衣上征塵雜酒痕、遠遊無處不消魂。此身合是詩人未細雨

騎驢入劍門。

（訳）衣服の旅塵に酒のしみがまじり、遠い旅路は到る処で心をふるわせた。私には詩人の名がふさわしいのだろうか、小さめにぬれるばに乗って国境の劍門に入っていく。

であつて、山越えて但馬に行く彦竜は、自分を陸游に重ね合わせるのである。右の陸游の軼・結句について、一海知義氏は次のように説く。

ロバで旅をし、ロバの背で詩句をねった有名な詩人に唐の李白、鄭棨、李賀などがあり、第三句の「詩人」はその連想をふまえていゝ。なお第四句の細雨騎驢は、ふつうならば詩人にふさわしい境地だが、自分はそれになつてしまふ運命なのだろうかとの歎息をふくむ。詩人としての自覚と、それをはねのけようとする気持との両方をふくんでいゝように思える。（傍線筆者）

彦竜が一海氏のように陸游の作を解したかどうか不明だが、「詩僧としての自覚と、それをはねのけて禅僧として第一義的に道を求めようとする気持と、両方を胸に懐いて但馬路を旅していった」のではなからうか。ちょっとあと戻りして前日の作を読んでみる。

攀嶮登時日已斜、嶮を攀じて登る時 日已に斜なり

山桜樹下梵王家、山桜の樹下 梵王の家

野僧応是詩人未、野僧應に是れ詩人なるべきや未や

今夜春衣不宿花、今夜の春衣 花に宿らず

これは成相寺に参詣した時の作で、起・承句は杜牧「山行」の「遠上寒山石径斜 白雲生處有人家」を下敷きにしており、さらに第二・四句は、西行の「ねがはくは花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」を連想させる。そして第三句は明らかに前述の陸游の作からのもので、第三・四句は、

拙僧は詩人にふさわしいのだろうか。今夜は春の衣を着ているけれども、（詩人のように）花の下に宿るつもりはない。

という意味で、夕陽の中の寺を望見して、禅僧としての自己を、更めて強く認識しているのである。さて、但馬での作、

和氣恰如游聖涯 和氣は恰かも聖涯に遊ぶが如く

清談日々に到西斜 清談日々に西斜に到る

任地三月客中尽 任地まもら あれ三月客中に尽くるとも

春在其人不在花 春は其の人に在りて花には在らず

京を出る時は、待<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>帰<sub>レ</sub>米<sub>二</sub>洛<sub>一</sub>下<sub>レ</sub>花<sub>二</sub>と<sub>一</sub>吟じ、さらに、為<sub>レ</sub>花<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>茅<sub>二</sub>（山房見花）<sub>一</sub>、句<sub>二</sub>每<sub>レ</sub>遇<sub>レ</sub>花<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>（琢子試筆）<sub>一</sub>、造次<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>梅<sub>レ</sub>顛<sub>レ</sub>沛<sub>レ</sub>桃<sub>二</sub>（展上已後）のように、こよなく花を愛する彦竜であるのに、結句の

ように吟せしむるのは、古璠の宗風・人格の力であった。

洛寺に帰った彦竜は、三十七日間の詩文を『西遊藁』としてまとめ、三會院南詢軒の月翁周鏡から、『何ぞ其れ歴日の太だ寡く、而も摘詞の太だ多く且つ工なるや』と激賞されるが、彦竜の真摯な求道心には、一言半句も触れぬ。

文明十七年は病臥のうちに迎える。山城でも大和でも又和泉堺南庄でも、一揆が頻発するが、次の作品は立春の前日に書いたもの、

梅雲は予と相反し、造次にも雪月に於てし、顛沛にも風花に於てす。故に隻字片言も、言へば則ち疏筍（坊主臭いこと）を一洗す。孰か歌艶せざらんや。

病床の彦竜は本当に疏筍の気のない梅雲承意の風花雪月の詩を羨んだのであろうか。

予頃者其の行卷二三策を借る。皆友社交接の間に、蘇小坡の艶簡に擬し、黄太史の艶詞に準じ、以て相ひ戯する者を爲る。予之を手にし之を口にし、百回翻覆すれば、文として会処有らざる無く、詩として悟入せざる無し。吁、百千の雪豆・円悟を重ぬるとも、焉んぞ

吾が梅雲を望まんや。

彦竜は梅雲の詩文が雪竇重頭や円悟克勤よりも秀れていると、心そこ考えていたのであろうか。もしそうなら、丹後・但馬旅行時のあの大勇猛心は一時的な気まぐれであったのか。

篇々愈出愈奇々 篇々愈いよ出でて愈々奇々

持戒村僧為氣移 持戒の村僧為に氣移る

暮誦艶詩朝艶簡 暮に艶詩を誦し朝には艶簡

共君携手入泥梨 君と共に手を携えて泥梨に入らん

○艶詩二あだめいた詩一。宋の『捫蝨新語』に、『黄魯直（黄山谷）初好作艶歌小詞。道人法秀謂「其以筆墨晦淫於我法中」当墜泥梨之獄。魯直自是不甚作。』とある。○泥梨二地獄一。

厳しく戒律を守る彦竜は、法秀円通禪師の「艶詩を作れば地獄に落ちるのはあたりまえ」という語をよく知っていたはずである。にも拘らず艶詩を口にするのは時勢に流されたのであるうか。『氣為に移る』と自覚的なのだから、この詩は逆説的表現であろうか。

涪幡（黄山谷）の破戒の轍を踏まざりしは、蓋し天に慙ぢ地に愧ぢ諸公に羞づるゆゑなり。……呵々。戯れに尊韻に依る者三章、聊か亦た自ら遣る。汝雪・友竹之を何と謂ふや。見察せよ。

傍点の語に、艶詩を口にする彦竜のためらいが表われている。

十一月十八日作の三首のうち二首読んでみる。この日は雪景色を月が照らしていた。

挙酒山中到漏闌 酒を山中に挙げ漏闌に到り

文鋒兵淬莫兼干 文鋒兵淬干を兼ねる莫かれ

艶詞今夜初開口 艶詞今夜初めて口を開く

若墮泥梨是八寒 若し泥梨に墮ちなば是れ八寒

○兵洋 刀剣をやいて水中にじゅんと入れること。○八寒 八寒地獄

○承句 激しく詩戦をいどんで来るな、という意

月従雪後興何闌 月は雪後よりし興何ぞ闌なる

纔到村僧没涉干 纔かに村僧に到るも涉干没し

握手争如近肌臥 手を握るも争でか肌近く臥するに如かん

逢之不遇奈吾寒 之に逢へども不遇にして吾が寒を奈んせん

さきの『野僧応是詩人未』という禅僧としての自覚と、この艶詩とを

どう結びつけて理解したらよいか。愛欲をあからさまに吟じた一休

の『狂雲集』を繙いた時の疑団が、ここでも筆者に迫ってくる。前記

の詩序の傍点の語、戯れに『聊か』、見察せよ、が疑団を解く鍵で

あろう。そこに私は彦竜の『時代の良心』を見るのである。

文明十八年正月早々、彦竜は近江に遊ぶ。

余為僧難日、寓江之南山者有年矣。尔来名譽利奔放軟紅

香土之間、頗似忘其旧。可不愧於心耶。丙午孟春十日、一

錫飄然、遠入湖山。蓋為一二故旧、賀歲以償間闊之罪耳。

傍線の文は、時勢に流されて名利に趨り、艶詩を口にした自分を恥じ

ているのである。

鷗朋鷺友笑相看 鷗朋鷺友笑ひて相看し

湖上新正来問安 湖上の新正来りて安を問ふ

有約年々総虚語 約有れど年々総て虚語

如今始取釣魚竿 如今始めて取る釣魚の竿を

○鷗朋鷺友 俗世を超越した友。○問安 尊長の人の安否を問う。

彦竜が安を問うた一人は崇壽寺の竜室玄珠であった。この人は先年と

もに丹後に旅した文成梵鷺の師である。

落ちついて静養する間もなく、二月九日には東雲景俗らと共に、宇

治から奈良に旅行する。東雲は滋野井実種の弟で伊勢貞宗の猶子とな

った人で、この時は十六歳であった。彦竜は各地で同行の僧と共に詩

を賦しているが、いずれも時流に押し流された凡作である。六月には

東福寺檀越紛争があり、彦竜は九条家の為に奔走するが、宿痾に悩ま

されて葛川に参籠する。しかし、七月には遊初軒の詩会と宴席に連な

り(五日)鹿苑院施食回向に列し(十五日)、秋には再び但馬に歩を運

ぶのであった。

某啓す。今年三十、生れて乱世に在り。東西に漂泊し、交わるべき

者皆江湖の名士也。

に始まる「与人絶交書」は、文明十九年秋に書かれた。公(絶交

の相手)とは十年前江東で談笑し、今年には又私を病室に訪ねてくれ

て、親密度を増した。二人はこのように宿契があるのだから、私は公

に言わねばならぬのだ」と、まず禅林の弊風から説きはじめるこの書

は、彼の禅思想を知る為に、詳説しなくてはならない。

方今叢林の不振は、某の如何ともする無きのみ。近世一種の邪説有

り。是れ道の蠱たり。……二三の有志の士、往々之が誘ふ所と為

り、他家の齏裡物となる。惜むべし。

禅界墮落の原因は只管打坐の衰退ではなく、邪説の流行にありと彦竜

は断じる。

邪説とは是れ何ぞ、一家伝授の句参話会、謎子訣の禪なり。実は一人の私言にして、天下の公言に非ざるなり。

○謎子訣 生き方に迷う子を導く方法。『無門関』十五に、獅子教児迷子訣とある。転じて父が子に密旨を口伝すること。この頃の謎子訣については『翰林胡蘆集』の「横川住景德山門疏」や卷四の鳳叔輝公に与えた詩序にも論じられていて、その大要を知り得る。

続いて彦竜は禅宗史に言及し、大慧宗杲が『碧巖録』を焼いた不立文字を挙揚する。

然りと雖も、仏祖法門を建立すとも、小玉の檀郎道はざれば之無し。某力めて其の弊を救ふ。

文脈から言えば、彦竜は「不立文字を守って何も言わなかったら、仏祖の法門も何もかも無くなってしまふ。その弊を救うためには、小玉の檀郎の言（艶詩）を作らねばならぬ」と言っているのである。

茶裡飯裡に挙足下足に、大自在を得、大快活を得、其の余を推して、以て人の為にせば、則ち詩に入り文に入り、花を成し柳を成し、或る時は経史子集、或る時は仏経祖録をば、説き得るも好し、説き得ざるも好し。

私は先につい筆のはずみで、禅界墮落の原因は只管打坐の衰退ではなく、と書いてしまったが、右の傍点によって、その誤記を訂正せねばなるまい。次に彦竜の筆は一転して、相手の攻撃に移る。

公の生長する所は一方の甲刹、名を籍く所は国初の叢林、方外にして漢問に則る。話の意、語の位は叢林諸師の知らざる所なり。其れ此の如くんば、則ち公異時に瑞世せば、身は叢林に在りて、叢林を

彦竜 周興 評伝

指して名場利路と為し、一言半句を以て葛藤椿を口授面伝し、奇貨居るべしと為す。自ら欺き人を欺くこと必せり。故に某を待するに剃頭の俗人の如くし、逢ひて論ずるは、大にしては史漢書札、小にしては文章詩句なり。嗚呼、心に愧ぢざらんや。

絶交の相手は建仁寺に掛錫する学問僧で、彦竜の顔を見さえすると、史記漢書の歴史書や書経礼記の五経、それに文章詩句のことばかり論じる人物であった。

公の見解を見るに、未だ常流を出ずして自ら力を着くる能はず、且つ盲を拍して謂く、「禅話に到りては、則ち紫野参学の外に、復た人有ること無し」と。ああ、何と思はざることの甚だしきや。

彦竜は、今之叢林者、何人所成禪之叢林乎。千光・恵日・大覚・正覚」と、日本禅宗の常流を栄西・円尔・蘭溪・夢窓に在ると考えているのに、「公」は紫野大徳寺の禅話を重んじていたのであった。まさに禅の大木を喰う虫であった。

某、叢林に在らずして此の身を終らば則ち已む。否ざれば則ち手に唾して宗綱を扶起し、切齒して道蠹を駆逐するは是れ職分なり。公、莊子孟子茄子瓠子を以て、叢林成禪の意を為す。亦た大錯ならずや。

『日録』によると、その頃莊子の講筵が屢々開かれて流行しており、彦竜は語呂をあわせて茄子や瓠子までも付け加え、学問ひいては謎子訣の禪にうつつをぬかす禅僧を、揶揄的に批判しているのである。一休宗純が『自戒集』に於て大徳寺の養叟一派を痛罵したのと、軌を一にする。

某の師事する所の一二の尊宿も、名は是の徒の如くあれど、仏法の為には罪人なり。是れ某の此に忍びざる所以なり。

と、彦竜の義憤は絶交の相手に止まらず、自分の師僧にまで及ぶ。それが具体的に誰を指すのか確かめるすべもないが、彼の強い正義感と頑固さが読みとれるのである。

長享二年三十一歳の元旦の「和徳大寺内府試筆韻」の七絶と序には、彦竜の文学観がよく表われている。書き下しておこう。

本朝は乃ち東海文物の国なり。古に在りて之を視れば、詩を以て世に鳴り文を以て家を起す者は、皆台閣中の人にて、光を国史に表々とす。王室中微して諸侯争ひ起り、尔より文者一麟・武者衆角、風月主無し。

徳大寺実淳を意識しての文章だが、公家中心の文学史観は、当時の一般的なものであったのだろうか。「王室中微」は鎌倉時代以降をさす。

唯だ方外に遊ぶ者のみ一吟一詠し、物に寓して懐を遣り、已むを得ざれば則ち往々章を成し編を成す者有り。然りと雖も蔬筍の氣、椒桂の韻、朝廷の上に置くべからず。

前年の「与人絶交書」で、「某今日乃叢林後生也。明日乃耆旧也尊宿也。豈有対叢林尊宿、而薄叢林、為無仏法、徒把玩雕虫篆刻、埋没宗風者乎哉。」（いたすらに詩文に凝って、宗風の墮落するのを看過出来ぬ）と述べていた彦竜であったのに、この序では「蔬筍の氣」を卑下しているのである。禪詩とは本来、自己の悟境を表現するものなのだから、「蔬筍の氣」は自ら文字となって表われ、それは当

然の事である。彼は「向上一着、行住坐臥、歴々可驗。学者至此、得些子力、則詩也文也、不学而伝矣。」（呈桃源書）と、平常心は道を会得すれば、詩文は自ら成るとも述べているのである。それなのに「蔬筍の氣椒桂の韻、不可置於朝廷之上矣」と言うのは、徳大寺実淳を称揚する為の、単なる謙譲の語として看過出来ない。文学観に於ても、禅僧としての当為（↑呈桃源書）と、歴史的現実的風潮（↑和徳大寺内府試筆韻序）との矛盾が、同時に内在していたのである。「日録」を見る限りでは、この年も彦竜は作詩・聯句に日々を過ごす。はじめの半年の記述を拾い出してみると、

蔭涼軒で聯句（二・廿三）鞍馬寺看花詩会（二・廿九）仙館院詩会（三・廿二）常喜軒齋会（五・四）勝定院詩会（五・五）金閣詩会（五・九）

怡雲軒詩会（五・十）葛川参籠、帰途に石山寺参詣（六・十四）蔭涼軒聯句（六・廿四）蔭涼軒聯句（六・卅）

『日録』の筆者亀泉集証の見聞に入らない彦竜の行動をも考え合わせると、彼の日常生活がほぼ推察出来る。むろん文雅に出席しない時刻には参禅に努めたであろうが、その行道は記録の上には表れぬ。蔭涼軒主の亀泉は、蘭坡・琴叔・横川・桃源・春陽・景徐・彦竜・東雲を「八仙」と称しているが（『日録』長享二、二、十九）、詩会を成功させるにはこの人達が必要だったのであり、必ずしも彦竜自らが望んで、処々の詩会に出席したのではなからう。確かに二月廿三日の付句などを読むと（拙著『五山詩史の研究』四三二頁参照）彼の非凡な文才がよくわかる。

長享三年元日、蔭涼軒書院の宴席に出た彦竜は、十四日にも同軒を



訪れ句を連ねる。

1 寶尊ニ孟万歳ニ (亀泉) 2 主楽ニ竹千正ニ (彦竜)

3 夢穩安巢鳥 (芳洲) 4 歌長出レ谷鶯 (茂叔)

5 梅分ニ南北暖ニ (丹昌) 6 柳弄昨今晴 (彦竜)

7 紅会自レ茲百 (彦竜) 8 素交無レ乃更ニ (亀泉)

9 僧竜云瑞世 (茂叔) 10 人鳳共登瀛 (芳洲)

○竹ニ酒の名の竹葉をもう。劉禹錫「憶江南」に無辞竹葉醉尊前とあり尊は酒だる。○千正ニ千年の正月。同じ音の千觴(何ばいも)千成(永久)を連想させる○出谷鶯ニ詩経の語で、不遇の地位から世に出る喩。

『日録』によると、この日、尾州から鶯鶯が亀泉に贈られている○梅分南北暖ニ『白孔六帖』の、大東嶺上梅、南枝落北枝開による○僧竜ニ竜の如く秀れた僧、彦竜を意識した語。

彦竜の脇句は孟に対して「竹」葉を付けて主坐の亀泉を祝い、柳は昨今の晴天を楽しむ」という第六句は、昌子の句に字々正確に対しており、柳弄の語はうらかな陽光に配するに妙である。第七句は一転して聯句の席を祝福する。「花紅、柳緑」によって第六句に連ねたのであろう。『日録』によると、此の年も各所の文雅の会に列なり、秋には再び奈良に行く。

延徳初元己酉秋、余病に臥し日有り、百葉も験なし、診視する者曰く、「患ふ所は他無し。積氣散ぜざるなり。腰脚の頑を散ずれば、則ち万に一の効有らん」と。是に於て笠と驢を借り、又城南に遊ぶ。(南遊三詩)

旅行が足腰の凝りをほぐすのに効があると勧められたのである。

出京九里歩松風 京を出て九里 松風に歩めば

彦竜 周興 評伝

鐘我知音答半空 鐘は我が知音にして半空に答ふ

東大々哉唯一仏 東大は大なるかな 唯一仏

山花如錦滿林風 山花は錦の如し滿林の風

○九里ニ国鉄時刻表によると京都奈良間は四一・七キロつまり約十里、九里松は松の名で浙江省の西湖にある。賈島「送僧歸天台」に、山門九里松とある。○知音ニ心の友「從容録」に此道未喪、知音可嘉とある。○唯一ニ仏ニ頭密の諸教はすべて大日如来の一時一処一教に歸する。ここは東大寺の大仏。○山花如錦ニ『碧巖録』六一の、花簇々錦簇々による。万法の垢染のないさま。

一見すれば「蔬筍の氣」の無い俗詩のようであるが、語注に示した賈島や禪録の用例を念頭に置き、承句を「半ば空」と読んだりすると、やはり凡作でない事を知る。

彦竜三十三歳の延徳二年も、蔭涼軒をはじめ諸院の宴席や詩会に出席した記事が『日録』に頻出し、閏八月、泉南の海会寺や円通寺を訪ねる。この地は養叟宗願ら大徳寺派が謎子訣の禪を弘めた所であり、一休宗純や南江宗沅が自在超脱の生活を送った所である。

話は横道にそれるかも知れぬが、彦竜と一休とは全く無関係ではないのである。彦竜の『半陶文集』に「題画」という七絶があり、その題の下に、「是れ墨斎老人の戲筆なり、老人の余に於ける、忘年なり、忘形なり」という細注がある。画才に富み、彦竜と年令や地位を超越した交際を結ぶ墨斎墨斎というのは、一休宗純の弟子の没倫紹等のことで、薪の酬恩庵や瞎驢庵に住していた。ちょうどこの延徳二年、墨斎は入京して彦竜と往来していたのであり、彦竜は、墨斎老人、先

是入洛、一往一來、相得如有三生旧縁者と という詩序を作って

いる。

さて彦竜の約五十日間の泉南滞在は、殆んど風雨に閉じこめられ、善慶院の天圭周瓏の詩会に出たり、『古文真宝』の講席を開いたりして九月九日に帰京し、亀泉集証に採での詩文一卷を見せる。一首だけあげておく。

海寺迎洛客

海寺相逢一咲春 海寺に相ひ逢へば一咲の春

烟波未必隔京塵 烟波未だ必ずしも京塵を隔てず

座中尽是青雲客 座中尽く是れ青雲の客

沙上白鷗佳主人 沙上の白鷗は佳き主人

○海寺||乾峰土曇の開いた宿松山海会寺。○烟波||もやのかかった水面。

崔顥「黄鶴楼」に烟波江上使人愁とある。○青雲客||隱逸の人。李白「書懷」に「一忝青雲客二登黄鶴楼とある。○白鷗||無心を象徴する鳥。李白

「江上吟」に仙人有待乘黄鶴 海客無心随白鷗

黄鶴楼に關連する語をさりげなく重ね、海寺の脱俗の暢心を吟じる。

泉南に閑居した南江宗沅の『漁庵小稿』にも鷗の詩語が多いが、幕府

の権力体制から独立して自由の氣の漲るこの地をうたうには、「白鷗」の語がふさわしいのであろう。十二月には慶甫宗誕の為に「妙興

寺入寺山門疏」を作っている。

延徳三年正月十六日、彦竜は友竹妙貞と共に伊勢參宮の旅に出る。病身なのに頻々と旅杖を手にするのは、「腰脚の頑を散ずれば万に一の効有らん」の診断を信じてであろうか。金溪梵鐸を訪ねるのも目的

の一つであった。さて、四月十四・十五兩日の『日録』に彦竜転位(首

座に昇進すること)について気になる記事がある。

彦竜転位の由之を聞く。若し官銭を出さるれば恰好ならず。上聞に達して転位すれば然るべき由功叔に白す。功叔返答して云く、「方丈造宮の義に就き、官銭の事白し定むる上は、台聴に達するに及ばず」と。官銭を出さるるは恰好ならず。此の分彦竜に達せられ、方

丈官銭を遺棄、上意を以て転位有るが尤も然るべし。彼の分上は以前に陞座禪客の時、委曲相公に聞す。然れば一級の事を白すべき

事、枝を折る類なり。

功叔周全は転位に当り方丈建設費を納める事は決定済みだと主張し、

亀泉は、彦竜は陞座乘弘や問禪の役を果たしているので、官銭を納め

て転位する事は「不恰好」だと反論しているのである。禅林の地位が

金銭で左右されるにががしい実例だが、禅院でのかかる官銭収入は

幕府財政を大きく支えており、彦竜もかかる禅林体制から逃れる事は

出来なかつたのである。どう決着したかは不明だが、「彦竜来会、「今

朝転位於後板」不面之(十七日)という記述があり、後版首座

に昇っている。以後、彦竜の病状は悪化、腹中に腫瘍が出来ているの

に、大智院即ち足利義視の中陰満散仏事に禪客を勤め(二、廿四)十

四歳の若君の櫛髮の役を勤めるなど(四、廿二)無理に無理を重ね、六

月三日巳刻、三十四歳の若さで示寂したのである。三条西実隆は「問出之雄才也。可惜々々」と哀惜し蔭涼軒主亀泉集証は、「誠宗門不幸

也。」と悲しみ、景徐周麟は「抑彦竜溘然、叢林如失左右手、実吾

輩不幸也。」(答友竹蔵主)と歎き、月翁周鏡は、

自公被葬北邙山 風月亦閑花亦閑 白玉楼成呼不返 愁声秋

### 早碧梧桐

○北郎山＝墓地○白玉楼＝文人の死。○碧梧＝鳳凰のすむ木。

と悼み、院僧はみな之に和した。月翁の悼詩の承・転句でもわかるように、同時代の禅僧たちは彦竜の文学的才能（作詩、聯句、四六疏、法語）を惜しんだのであって、第一義たる禅定をたたえたものではなかった。室町時代末期の歴史的空間を考えれば致し方ないであろうが、彼の禅僧の良心に苦しんだ生涯を思うと痛々しい。

### あ と が き

彦竜周興が生まれた長祿二年に、一休宗純は六十五歳で、一休が批難罵倒した叢叟宗頤が没している。一休の『狂雲集』は、悟得と破戒、超俗と生々しい現実、自信と自己嫌悪等、相反するものが共存し、森侍者との赤裸々な愛欲をうたう大へんな詩偈集であって、私ごとき凡俗は一休の詩精神、禅の本質はとても理解することは出来ない。彦竜も程度の差こそあれ、矛盾的诗精神を有する人であった。「与人絶交書」の禅骨と『暮誦艶詩朝艶簡 共君携手入泥梨』の詩心の両極を内在する人であった。一休は林下に在って腐敗せる禅界に警鐘を乱打したが、彦竜は貴族的閉鎖的叢林で道心を貫徹しようとし、結果的には時勢の潮流に巻きこまれ天折してしまった。私が彦竜周興をもう一度論じようと思いついたのは、彼に「時代の良心」を見出したからであり、不可解の一休像を周辺から洗い出してみたからである。なお、注で禅僧の経歴をやや冗長に書いたのは、彦竜の生きた史的場を

少しでも映し出した意図からである。

- 注(1) 『蔭涼軒日録』長享三年正月廿七日、廿九日、同年二月廿一日、廿六日、及び廿八日の条。
- (2) 『平陶文集』の「啓勝整書に」『抑僕生於陶坊』とある。
- (3) 『平陶藻』冒頭の「古岩大祥忌」の拈香法語が、彦竜の亡父の為のものらしいが不明。
- (4) 注(1)の「日録」による。「実隆公記」（永正十七、正、十七）に「石井河内守来」の記事がある。
- (5) 『平陶文集』（以下「文集」と略称）二の詩序に「余爲童時、寓湖之西涯。また、余爲僧雛日、寓江之南山者有年矣。」とある。
- (6) 『文集』二に「心仁丁亥四海駭屑……予也匿跡於河内楠葉」とある。
- (7) 『日録』（文明十九、三、廿七）に、「河内国交野郡楠葉如意山伝宗寺々領目録一冊、清住院より到来」とある。清住院は建仁寺内の蘭洲良芳の塔所。
- (8) 『菖菴集』に「胤仲住現福江湖」があり、『文集』には「前現福胤仲禪師住洛北真如同門疏」があり、文明十一年十二月に真如寺に住している。なお彦竜は「悼胤仲西堂寄濃之字江普蔵主詩」の七律を作り、「与子薦書」では「去歲胤仲老人脱去、衆善和尚亦然。何其天奪老成、如此多欲耶」とその死を嘆いている。
- (9) 『文集』二に「予之去楠葉者、文明癸巳也」。
- (10) 黙堂という同じ道号の人があってまぎらわしい。『懶室漫稿』の贊の「黙堂和尚」は年代があわぬから論外として、『翰林菖菴集』の「次小補賀黙堂住円覚」がこの祖久かと思つて玉村竹二「円覚寺史」を調べたがその名は記されていない。景徐周麟は「黙堂老禪予之五十年交友也」と述べ、駿河の大富山善得寺で円覚寺公帖を受けたとしている。ところで『日録』の「真如寺住黙堂西堂今朝退院」という記事は長享三、五、十二のもので、文明十五年に示寂した黙堂祖久とは全く別人の黙堂寿昭という瑞溪周鳳の法嗣であることがわかった。結局彦竜の師の経歴は今

のところが不明で、今後解明されねばならない。

(11) 法系は寂室元光―靈仲禪英―傑巖禪偉―栢舟宗超。近江の人で永享十二年足利に遊学する。横川景三は近江蒲生郡景珠庵で、応仁二年八月廿五日、栢舟の母の竹芳貞公禪尼の為に法語を作っている。栢舟は文明元年頃は曹源寺に、同二年に美濃多芸庄の莊福寺に住持している。「補庵京華統集」の「寄無底庵栢舟和尚」によると、小倉実澄も彼から内典外典の講義を聞いている。なお文明十三年に永源寺を訪れた彦竜は、含空院（開山塔）の栢舟の教えを受けた。明応四年十一月十二日、八十歳で示寂した。

(12) 法系は無本覚心―孤峰覚明―聖徒明麟―伯巖殊楞―利涉守溱である。「東海瑤華集」に「利涉」の道号頌がある。「村庵稿」下の「利涉溱首座住雲州雲樹山門疏」により、出雲の雲樹寺に出世したことがわかる。

「村庵稿」の「次韻利涉氷山道中作」（長祿三年作）はこの出住の旅らしく、半生只慣作詩苦の句により文学僧であった事が知られ、「蕃葡集」の「利涉住万寿江湖疏」にも、某錦綉文章、冰雪襟度、朝経暮史昼史夜集、とある。野雲と号し、横川景三、蘭坡景苗、万里集九らと雅交を結ぶ。「百人一首」所収の「秋灯話旧」は「補庵京華後集」によると、文明十年秋の作である。南禅寺に在住したあと禪栖院に退き、以後、岐陽の靈葉山正法寺の開山塔に住し、延徳三年秋、飛驒の湯泉に旅して万里らと聯句に興じているが、没年は不明。

(13) 佐々木杜太郎「小倉実澄伝」参照。

(14) 滋賀県野洲町永原出身の武士。永原天満宮の近くに永原城趾があり、「日録」（長祿三、十二、八）によると馬淵氏の被官で常徳院末寺の正法寺の檀那であった。現在常念寺に歴代の墓がある。「補庵京華統集」の「梵字天神贊」（彦竜が代作）に、連歌に長じていたことが記されている。

(15) 瑞溪周鳳の「臥雲稿」によると、古播周璜は、侍者の時に足利義持の知遇を受け、瑞溪などは雲の上の人のように仰いでいた。しかし恭謙な人で、自ら貴人の衣を脱いで茅屋に住し、学問に励んだという。「雪樵独

唱集」にも、古播老人万年奇衲也。久寓但之旧業、無意于出。故諸老同瓜葛者、惜其賢在野。以彦竜為皇華要、再觀晴月生。嶺云々、とあり、景徐周麟も、古播禪師、四十年前吾山風流之首称也。（延諭）と述べている。

(16) ほんの一例をあげるなら「實際公記」（文明十二、八、十四）「後法興院記」（文明十三、八、三）は、宮中で蘭坡景苗が黄山谷詩を、文叔真要が蘇東坡詩を講じたことを記し、「日録」の連日の記述は五山僧の遊宴を書き留めている。

(17) 横川景三の「慈峰居士像贊」「慈峰禪門尽七日拈香」により文成の出自がわかる。先祖は紀州武内氏の子孫で南朝に仕えたが、後に摂津の広瀬に移住し、文成の父（法名が慈峰居士）は都の宇野氏に養われ腕力があり、相撲が強くて一色氏に愛され、応仁乱には一色軍に属し功を立てた。その後京の烏丸で商業に従事し、菴室玄珠らに参禅し、文明十二年六月廿四日に卒した。文成は父の縁により菴室玄珠の法を嗣ぎ、彦竜の語を借りると、力学志道、実今世之古君子、で、その書室を「葵軒」と称した。文明十八年国信使に従って朝鮮に渡り、延徳四年には明に航し、その帰国の船中で示寂した。四十余才であったという。月舟寿桂の「小軸普応国師尊像記」も参照し得る。

(18) 一海知義「陸游」（中国詩人選集）二〇頁。

(19) 結句は、「後漢書」襄楷伝の、桑下に三宿せず、をも踏まえる。この語意は、僧は桑の木の下に三泊しない―人の恩恵を受けず絶ちきる、という意である。なお、一休の「狂雲集」に「春衣宿花」という七絶があることも付記しておく。

(20) 「詩人玉屑」卷二十「禅林」の中に、無蔬荀気の項があり、禅詩評価の一の基準であった。

(21) 梅雲は仙巖澄安の法嗣で、横川景三の「梅雲字説」によると、はじめ季柏と号したが、希世靈彦が梅雲と命名した。横川に従って学び、勝定院の友竹妙貞と親しくよく聯句を作る。書室を歳寒と称す。等持寺に在住し、永正二年二月四日歳寒室で示寂。景徐の「祭梅雲和尚文」によって

も、美文艶詩に巧みだったことがわかる。『玉塵抄』巻四十三に、常徳院の梅雲西堂ハ作者ナリ。横川ノ門下生ナリ、詩ト手トハ吾ニヲトラヌトイワシムタゾ、とある。

(22) 『文溪字説』に文明丙午、余賀、歳到江崇、寿、見菴室とある。

(23) 『美隆公記』によると、文明七年五歳の時、八月十一日に横川の室に入った。横川の外集を見ると、文明九、十、十一、十二年と、毎年の新年試筆を代作してやっている。月翁周鏡の「東山公得度記」（実彦が代作）は文明十七年六月十五日、足利義政の侍者を勧めたことを記す。

『日録』（長享二、正、廿二）によると、蔭涼軒宴会の時、紙でくじを作つて美人の名を書き、暗中で一枚ずつ引くと、亀泉は東雲のくじを当て心をときめかせている。又、長享三、七、十四の記述では、東雲は月嶺らと共に四美と称せられており、彼は貴種で美男子で禅林での寵童で、墮落せる当時の禅林の象徴であった。永正四年蔭涼軒主となり、鹿苑僧録にもなった。『美隆公記』によれば大永七年八月廿九日、五十九才で示寂。

(24) 『日録』の文明十九年六月八日、九日、十二日及び廿二日の条参照。

(25) 『日録』の文明十八、六、十一。同月廿五。同月廿九の条参照。

(26) 墨斎は横川景三とも交りがあり、『補庵京華外集』の「謝芒履詩」の序によると、晴驢辺墨斎老和尚は繁蔵主という人の俗弟ではじめ天竜寺に隸して風流第一と称せられ、後に紫野一休の会下に入ったのである。

(27) 『日録』（延徳二、十、十）参照。

(28) 『日録』（延徳二、十、十九）参照。

(29) 『漁庵小稿』には、心事君其問白鷗（高石寓居）万里閑鷗夜々心（送子溪少年還京）鷗不飛来説向誰（題画山水）又招鷗鷺倚漁磯（雨遊漁庵）白鷗長怨夕陽（扇面）など挙げればきりがない。

(30) 南浦紹明の四世の法孫に当る東溪の法を嗣ぐ。希世靈彦や万里集九について詩文を学び、文明十二年冬建仁寺で乗弘を遂げる。『日録』延徳二年十二月十五日の条に、宗誕首座字慶甫建仁大統僧也。横獄派也」とあって、南浦紹明の横岳派でありながら、青山慈永の開いた大統庵に居し

ている。ここで想起するのは、「与人絶交書」で、絶交の相手は建仁寺に学ぶ横岳派の僧であった。私は彦竜が同書で厳しく批判したのは右の傍点の語によりこの慶甫ではないかと考えたこともあったが、山門疏を製作してやるぐらいたからそうではあるまい。『梅花無尽蔵』の「賀住山」によると、当時妙興寺は内紛があり、慶甫が入寺して鎮めたのである。後に南禅寺公帖を得たらしく、景徐周麟は「前南禅慶甫和尚肖像賛」がある。

(31) 法系は絶海中津―宝山乾珍―季睦梵怡―友竹。横川景三は梅雲承意と共に将来を囑望し、長享二年頃は勝定院の桃源瑞仙の侍衣となり、延徳二年四月、鹿苑院で月翁周鏡陞座の問禅をつとめ、永正三年、景徐と相談して渡明する。その時の「送貞友竹遊大明国序」や「答友竹蔵主書」に友竹の人格がよく記されている。例えば、人となり耿介、時と相ひ背馳し、とか、彼の言として、「経は黄卷赤軸に非ず、私は木刻塑像に非ず、屋上の山即ち法身、屋下の水即ち広舌にして、此の中に在て以て嘯歌し、以て啐嗟す。礼仏看経斯の如きのみ」と記している。後に相国寺に住した。

(32) 法系は絶海中津―用剛乾治―金溪。『日録』（明応二、四、五）の記事により永享四年生まれ。景徐の「前南禅金溪和尚寿容」によると東洛に生まれ、少時は奈良で五年間仏学に励む。『日録』（延徳二、七、二）に、これ迄の遣明使は唐人に詩を詠えて日本の恥だったが、今度は能僧を任命しよう、と、金溪が選ばれたとある。『鹿苑日録』（明応八、四）にも当代第一の人と評されている。彦竜の「与金溪長老書」によると、伊勢旅行の時、彦竜は金子を借りている。『松蔭吟稿』の琴叔景趣とも雅交を結ぶ。伊勢に地縁が深く、聯芳寺を起し、景德・臨川・相国・南禅に歴住した。景徐の「金溪和尚入牌祖堂仏事」によると、永正六年冬に示寂している。

(33) 敵中周盟の法嗣。俗兄は法名を善福寺殿南堂居士といい、將軍の近習で、一生独身で文明十七年東山で逝去している。（横川景三「和南堂居士挽詞序」による）功叔の道号は希世靈彦が命名したもので横川は「功

彦 竜 周 興 評 伝

叔字説」を書く。文明十七年四月秉私を遂げ、七月頃は勝智院塔主だったが、文明十九年正月、幕府の勘気をうけ、一時逐電した。『後法興院記』（延徳二、三、廿二）によると、姉小路等相や彦竜らと漢和連句を楽しみ、貴族との文雅の交があった。延徳三年正月、亀泉は蔭涼軒主を退こうと功叔を後任に推すが將軍に許されず、同三年四月大智院塔主と

なり、五月に『劍南詩稿』を売り払ったことが『日録』に見え、六月十一日には養花軒を新造して移転している。この軒は、其屋接紫禁”つまり皇居に接していた。延徳四年五月、輪番により勝智塔主となり、同八月に等持寺に入院した。四十一歳で示寂したが没年不詳。

(34) 今谷明『戦国期の室町幕府』第一章参照。